



南部町立南部中学校 学校だより 第23号

千一ム南部中

令和5年 3月15日(水)
校長 望月和彦

第12回卒業証書授与式 49人の巣立ち

3月9日(木)麗かな春の日差しの中で第12回卒業証書授与式を行いました。佐野和広町長、入月一巳教育長、町議会正副議長、教育委員の皆様のご臨席を賜り、保護者の方々が見守る中で、卒業生一人一人に卒業証書を手渡すことができました。胸にリボンをつけ背筋をピンと伸ばして座る姿勢、担任の呼名に応える「はい」の声、ステージ上で証書を受け取り私の目を見て「ありがとうございます」と答える姿。南部中学校で3年間学んだことに自信と誇りを持ち、旅立ちの時を迎えた凛々しい姿でした。



入月教育長さんは告辞の中で「直接見る事ができた輝城祭は、強く心に残っています。南部の町に響き渡るようなウッドデッキでのソーラン節の迫力、皆さんのカー杯の演技に鳥肌が立つような思いでした。また、演劇『ふるさと』では、心のこもった演技に涙が出るほど感動しました。私が今まで見た演劇の中で、一番心に残った発表でした。『これが最上級生だ』という皆さんの心意気を見る思いがしました。南部中学校の伝統を引き継ぎ、さらに発展させた皆さんの功績は大です。今、山梨県最南端に“キラリ”と輝いている南部中は、私たちの自慢の中学校です。」と卒業生の功績を讃えていただきました。1・2年生を代表してただ一人出席した遠藤夏奈さんは送辞の中で、3年生から学んだことや教わったことに対する感謝の気持ちを伝え、最後の部分で「私たち在校生はこれまで先輩方が繋いでくださった伝統を受け継ぎ、今度は私たちが後輩の見本となるよう頑張っていきます。すべての生徒の関わりを大切にして、学校全体が一つになる。そんな学校を目指して一步一步進んでいきます。そんな私たちが温かく応援して下さったら幸いです。」と在校生としての決意を伝えました。



そして、卒業生の答辞。合唱台に並んだ卒業生は、入学したばかりの頃のこと、2年生になり後輩ができてからのこと、最上級生として南部中の顔になってからのこと、そして卒業を迎えた今の気持ちを、一人一人が言葉を繋ぎながら、会場にいる人たちに伝え、自分自身の心にも刻んでいるようでした。呼びかけの中に組み込まれた合唱曲「証」「大地讃頌」の2曲は、コロナ禍の中でも南部中文化として取り組んできた合唱の成果を表すものでした。最後に、卒業生代表の芦川圭澄さんが「(略)私たち49人は多くの期待を背負い、この南部中学校を卒業します。これから私たちが進んでいく世界は全く予想できない世界だと思います。なかなか努力が報われないこと、思うように物事が進まないことなど、自分たちが予想していない困難が突然やってくるかもしれません。これから私たちが進む未来に『正解』はきっとありません。それぞれがそれぞれの『正解』を見つけるため、自分自身や周りの仲間と向き合い、進んでいこう。自分の良さを見つけ、活かしていこう。仲間の挑戦を支え、喜び合おう。広い視野を持ち、苦しいときこそ人に優しく接していこう。そして、ここで共に学んだ仲間と南部中学校を思いだそう。私たちはこれからも、自分や仲間の良い変化を掴んでいくことをここに誓い、答辞といたします。」と新たなステージへの力強い決意を述べました。体育館に響き渡る卒業生による「校歌合唱」で、厳粛な空気の中に、大きな期待と温かさの

証書授与式



そして、卒業生の答辞。合唱台に並んだ卒業生は、入学したばかりの頃のこと、2年生になり後輩ができてからのこと、最上級生として南部中の顔になってからのこと、そして卒業を迎えた今の気持ちを、一人一人が言葉を繋ぎながら、会場にいる人たちに伝え、自分自身の心にも刻んでいるようでした。呼びかけの中に組み込まれた合唱曲「証」「大地讃頌」の2曲は、コロナ禍の中でも南部中文化として取り組んできた合唱の成果を表すものでした。最後に、卒業生代表の芦川圭澄さんが「(略)私たち49人は多くの期待を背負い、この南部中学校を卒業します。これから私たちが進んでいく世界は全く予想できない世界だと思います。なかなか努力が報われないこと、思うように物事が進まないことなど、自分たちが予想していない困難が突然やってくるかもしれません。これから私たちが進む未来に『正解』はきっとありません。それぞれがそれぞれの『正解』を見つけるため、自分自身や周りの仲間と向き合い、進んでいこう。自分の良さを見つけ、活かしていこう。仲間の挑戦を支え、喜び合おう。広い視野を持ち、苦しいときこそ人に優しく接していこう。そして、ここで共に学んだ仲間と南部中学校を思いだそう。私たちはこれからも、自分や仲間の良い変化を掴んでいくことをここに誓い、答辞といたします。」と新たなステージへの力強い決意を述べました。体育館に響き渡る卒業生による「校歌合唱」で、厳粛な空気の中に、大きな期待と温かさの



籠もった卒業証書授与式が幕を閉じました。

式が終了すると、A・Bのそれぞれの教室では、学級担任と生徒たちの最後の学活が行われました。A組では岩崎真也教諭と男子卒業生が熱い抱擁をしていたり、B組では飯島健太教諭が目を通り赤にして担任としての願いを伝えていたり、とても素敵な時間になったようです。保護者の皆様には、体育館とランチルームに設置したモニターを通して、学活の様子を視聴していただきました。

私は幸いにも、卒業生たちが本校に入学した時から、3年間一緒に生活することができました。卒業証書を渡すときには、一人一人の中学時代の思い出が心の中に浮かんできました。活躍する姿、楽しんでいる姿、一生懸命がんばっている姿もあれば、悲しんでいたり、悩んでいたりする姿も思い出されました。49人は南部中生として3年間という同じ時間を過ごしましたが、心に残る思い出や中学校生活に対する思いはそれぞれだと思います。しかし、卒業証書を渡したとき、すべての生徒が間違いなく内容の違いはあれ、確実に成長してくれたことを感じました。これから先も、49人の伸びしろは無限です。4月からの新たなステージで、大きく大きく成長してくれることを期待しています。

会場づくりと片付けで感謝の気持ちを

卒業式前日の8日、生徒会執行部がリーダーとなり、1・2年生全員で卒業式の会場づくりを行いました。イス並べ、長机の設置と白布かけ、国旗・町旗の掲揚と校旗の設置、パンジーのプリンターやペコニアとサイネリアの鉢の設置、メッセージや式次第の掲示などです。事前の計画に従って、生徒会執行部がリーダーになり、役割ごとに指示を出して、準備を進めました。教師からの指示は最小限にして、生徒たちが主体となって考え、協力し、スムーズに準備を進めることができました。卒業式に参加できない1・2年生が、素敵な会場をつくることで卒業生に感謝の気持ちを表すとともに、作業しながら最上級生や先輩となる自覚を高めているようでした。卒業式翌日の1校時には、同じように片付けを生徒主体で行いました。生徒たちの動きは素早く、あっという間にいつもの体育館になりました。



1・3年合同の理科の授業

2月24日、ランチルームで1年生と3年生の合同理科の授業が行われていました。岩崎真也教諭が1・3年生に投げかけた課題は、「次の高校の入試問題を解いて、自分が考えた答を何人かに説明してみよう」というものでした。その入試問題は、1年生が授業で学習したばかりの「地震と地層」の問題でした。3年生が1年生に教えてあげているところもあれば、反対に1年生が3年生に説明しているところもありました。頭では理解していると思っても、うまく説明できないことがあります。他者に説明することによって、よりレベルの高い理解につながっているようです。学年を越えての学び合いを仕組んだ授業でした。



「シチリアーナ」発表会

2月28日、3年の音楽の授業でギターの発表会が行われました。演奏曲はイタリアの民謡「シチリアーナ」です。3~4人のチームをつくり、メンバーそれぞれが別々のパートを演奏します。それまで練習してきた成果をチームで合わせて発表する本番でした。ステージの上になると、どの生徒も真剣そのもので、チームの仲間と気持ちを合わせて一生懸命演奏していました。緊張して納得のいく演奏ができなかった生徒もいたようですが、私が予想していた以上の素敵な温かい演奏でした。ワークシートに自分たちの演奏を振り返るとともに、他のグループの演奏の感想を書いて、学習をまとめていました。卒業前の楽しい音楽の授業の一コマでした。



卒業生へ地域の方々からの贈りもの

福土にある介護施設「たすけあい・きららデイサービス」の方が来校し、「卒業生に渡してください。」とお守りをいただきました。「デイのおばあさんたちが一生懸命折った折り鶴です。これからも新しい道に進み、がんばってください。」とのメッセージが付けられていました。卒業式の前日に卒業生全員に渡すことができました。本校の生徒たちは、地域の方々の温かい気持ちに支えられています。

